

俳雑

第17回

【小沢昭一の俳句】

八木 忠栄

名優・小沢昭一が亡くなったのは二〇一二年十二月。早いものだ。彼の出演した映画をはじめ、ラジオ、舞台から著作まで、そのユニークさ、器用さにはいつも舌を巻いていて、その晩年まで私は熱心なファンの一人だった。初期の『私は河原乞食・考』『陰学探検』などに始まって、ずっと目をそらすことができなかった。それらは私にとって硬軟にわたる〈聖画〉であり〈聖書〉であった。

あるとき、私が所属している句会に、小沢さんがゲスト参加したことがある。みんなを終始静かに笑わせてくれた。それ以来、小沢さんはさまざま著作を、その都度送ってくださるようになった。

小沢さんは俳句も得意で、「東京やなぎ句会」のメンバーだった。俳号は〈変哲〉。俳句は以前から拝読していた。好きな句が多いが、とりわけ次の句がいちばん好きだ。

煮ごりやママ独身といふ噂

晩年の句だが、いかにも小沢昭一らしい意味深なユーモアがこめられている。小沢さんのニンマリとした得意な表情さえ窺えるようだ。亡くなるときに出版された『変哲半生記』に、生涯の約四千句と一緒に収録されている。